
翠玉慕情

ShellieMay

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

翠玉慕情

【Nコード】

N7223X

【作者名】

Shellie May

【あらすじ】

たけとみかなこ

廣徳華奈子は、地下にある会員制クラブで1人の外国人に出会った。

婚約者を妹に奪われ、家も追い出されてしまうと知り、打ち拉がれた華奈子を、美しい緑の瞳を持つ彼は自分の屋敷に拐って行く。優しく慰めてくれる彼に心を許す華奈子だったが、様子の変わって来た彼の態度に段々と不安になって…。

やがて、華奈子の家に伝わる『幸運と繁栄をもたらすエメラルド』と噂されるブローチを巡り、2人の思いと先祖の思いが交差する。

そして、舞台はアメリカへ…。

少しぼっちゃり系の至って普通な容姿の大和撫子×見た目は紳士なイケメン外国人俺様暴走系の富豪の恋です。

今回も『Camellia 〜カメラア〜』から連城夫妻が、『新宿のネコ』から柴健司が客演してます。（笑）
時系列を合わせて読んで頂くと、面白いかもしれません。

毎日更新予定です！！

第1章

大通りから細い路地を入り曲がった角にある、地下に伸びる小さな階段。

その階段を降りきった所にある重厚な木製のドアの前で、若い女性が逡巡していた。

カッソという靴音に振り向き、驚いて泣き出してしまいそうな瞳を私に向ける。

「…Sorry」

そう言つて踵を返し階段を昇ろうとするが、私の躰がつかえて立ち往生してしまう。

「入らないのですか？」

私が日本語で尋ねた事に驚いたのだろう、少し目を見開き又逡巡し俯いてしまう。

重いドアを少し開けると、ドアの内側でカランコロンとドアベルが軽やかな音を立てた。

「…どうぞ」

そう声を掛けると、おずおずと私の顔を見上げ、じっと私の瞳を見詰めた後、諦めた様に一步を踏み出した。

「いらつしゃいませ」

「こんばんは」

「今夜は、お珍しいですね」

店のマネージャーが、私の前に立つ彼女を見下ろして微笑んだ。

「あ…いえ…私は…」

そう小さく呟く心許ない様子に、私は自然に彼女をエスコートしてしまふ。

「カウンターで宜しいですか？」

「え？」

「今夜が、デビューなのでしょう？」

その言葉に赤くなつて俯き、彼女は小さく頷いた。

「どうぞ、こちらに…」

マネージャーの合図で現れたウェイターに導かれ、私達はカウンタ―に並んで座った。

「いらつしやいませ、ご注文は？」

カウンターの向こうから、馴染みのバーテンダーが声を掛ける。

「私には、いつものを…彼女には…お酒は、お強いですか？」

「いえ…殆ど飲めません」

「それでは、ベリー二を」

彼女のピンクのワンピースに合わせ、私は軽いカクテルを注文した。

「畏まりました」

バーテンダーが去ると、溜め息と共に彼女の肩から力が抜けた。

「…無理矢理お誘いして、ご迷惑ではありませんでしたか？」

「いえ…助かりました。このような場所は初めてで…1人で入るには、敷居が高くて…」

「お名前をお伺いしても宜しいですか？Miss…」

隣で顔を覗き込む私に、彼女は始終俯き加減で、少し考える様にカウンタ―に組んだ手を眺めていた。

名前を尋ねられ、本名を答えるべきか悩んでいるのだろう。

「私は、エドと申します」

そう言つて手を差しのべると、彼女は慣れぬ手付きで握りながら小さく答える。

「私は…ケイ…と申します」

「本名では…無いんですよね？」

「名前の頭文字です」

ふんわりとした手の心地好さに握り返したまま手を離さない私を、少し抗議の色を孕んだ日本人特有の切れ長な目でチラリと見上げられ、仕方無く私は彼女の手を解放した。

私の手を拒むというのか…面白い…。

バーテンダーが私の前に琥珀色のバーボンの入ったロックグラスを、

彼女の前に薄桃色の気泡を上げるフルートグラスを置く。

グラスを持ち上げ、彼女が同じ様に持ち上げるのを待つと、私は警戒心を起こさせない様に細心の注意を払いながら微笑んだ。

「2人の出会いに、乾杯させて頂けますか？」

少し緊張した様に頷き、彼女はグラスを上げる。

軽やかなグラスが合わさる音を響かせて桃色の液体を口に運ぶと、その口当たりの良いカクテルに彼女は初めてフワリと花が綻ぶ様に微笑んだ。

「気に入って頂けましたか？」

「ええ、とても美味しいですね」

「ピーチネクターとグレナデンシロップに、スパークリングワインを合わせたカクテルです」

「桃色が…とても綺麗…」

もう一度微笑んで一口味わい、彼女は珍しそうに店内を見渡していたが、見詰める私に気付き恥ずかしそうに俯いてしまう。

色の白いふくらとした頬が桜色に染まったのは、酒の為かそれとも…。

「もしかして、どなたかと待ち合わせだったのではありませんか？」
入口で立ち往生していた様子を思い出して尋ねると、彼女は寂しそうに微笑んだ。

「…多分、来ては貰えません。はつきり約束をした訳ではありませんから」

「でも、期待している？」

「…そういう訳でも無いんです…ただ…ちゃんと話を聞いて欲しいと言われたので…」

「相手の方は、ここのメンバーなのですか？」

「え？」

「ここは、会員制のクラブなんですよ？」

「そうなんですか！？…メンバーなのはわかりませんが…以前彼が、この店で誕生日を祝ってくれると言ったんです」

「お誕生日なのですか？」

寂しそうに頷く様子とは裏腹に、その淡いピンクのワンピースは、祝って欲しい彼女の気持ちの表れなのだろう。

店内に流れる静かなジャズが、彼女を優しく包み込む。

気を取り直した様に顔を上げ、彼女が私の瞳を覗き込んだ。

「エドさんは、この店のご常連なんですか？」

「エドで結構ですよ。この店には、週に2回程来ていますね」

「この近くにお勤めですか？」

「ええ」

「とても日本語がお上手なんです…お国はどちら？」

新しい経験に、少し興奮し頬を染めながら質問を続ける様子が愛らしい…幾つ位なのだろうか？

東洋人の年齢は判りづらい…クラブに足を踏み入れるのだから、20歳は過ぎているのだろう。

上品な佇まいの中に漂う初々しさと、少女の様なふつくらとした容姿が何とも言えない愛らしさを醸し出す。

クルクルと変わる表情を目を細めて眺めながら、少し笑って私は尋ねた。

「…私に、興味が有りですか？」

そう尋ねた途端彼女の顔から笑みが消え、オドオドと目をさ迷わせ泣き出しそうな顔をして立ち上がった。

「…申し訳ありません…見ず知らずの方に、詮索する様な事…」

そう言つて深々と頭を下げると、バッグの中の財布から数枚の紙幣を取り出した。

そして震える手でカウンターに乗せ、驚く私に申し訳なさそうに小さな声で尋ねた。

「…これで…足りるでしょうか？」

「待つて下さい、ケイ…何か気分を害されましたか！？」

「いえ…本当に、申し訳ありません…」

震えながら頭を下げた彼女の目から、キラリと光る雫が床に落ちた。

私は慌てて立ち上がり、背中に手を添えて席に座る様に促したが、彼女はジリジリと後ろに下がりがら俯き辞退する。

驚いた…自分に興味が有るのかと尋ねただけで、同席する事を拒まれる等思いもしなかった…ましてや、女性に泣いて拒まれる等…。

頑な態度に半ば諦めかけた時、彼女の背後から甲高い声が掛かった。

「…お姉様!？」

途端にビクリと痙攣した彼女がゆっくりと振り向くと、彼女の背後に居たカップルが揃って驚いた様な表情を見せていた。

「驚いた…やっぱり、お姉様だわ!こんな所で、何をしていらつしやるの!？」

甲高い声の主は、余り似ていないが彼女の妹なのだろうか？

派手な顔立ちと化粧に負けない様な原色のサイケ模様のドレスをまとい、隣で微妙な顔をして佇む男にしなだれ掛かる様に腕を組む。

彼女は顔を強張らせて2人を見詰めると、悲しい瞳を相手の男に投げ掛けた。

「それにしても…お姉様も隅に置けないわね!孝さんと婚約破棄した途端に、もう次の男をくわえ込んでるの?然もイケメンの外国人!?引つ込み思案のお姉様にしては、意外なお相手だわね?」

「…そんな事」

「あら、私は安心したのよ?これで、心置き無く孝さんと結婚出来るもの。そうそう…今日、お父様にも話して許可を頂いたわ!孝さんが会社を継ぐと発表した途端に、お姉様との婚約破棄でしょう?お父様も気を揉んでいらつしやって…私と孝さんの事、驚いていらしたけれど喜んで下さったわ!」

キンキンと捲し立てる妹を尻目に、彼女は静かに小さな声で男に尋ねた。

「…何故なの、孝さん?」

「…」

「…何故、絵美を連れていらしたの?」

「何を仰っているの、お姉様?孝さんがいらつしやる所に私が同行

するのは、当たり前でしょう?」

「…説明…して下さるんじゃない?」

「…華奈子」

煮え切らない表情を見せる男に、哀れみと侮蔑の眼差しを送り、彼女は店を出て行こうとした。

甲高い声が、その背中に追い討ちを掛ける。

「お姉様…私達、あの家でお父様達と一緒に暮らす事にしたの。それで申し訳無いんだけど、お姉様には家を出て欲しいのよね」

「あそこは、亡くなった母が…廣徳が引き継いで来た土地でしょう? 何故私が出なければ行けないの?」

「でも、今はお父様の家であり土地でしょう?」

「それは…」

「やっぱり、婚約破棄したお姉様と孝さんが一緒に暮らすのって、不自然じゃない?」

「…」

「可愛い妹と幼なじみの孝さんの幸せと、廣徳海運の為に…お願いね、お姉様」

俯いて黙ったまま手に持ったバッグを握り締め、彼女は2人の横をすり抜けて入口に向かった。

追い掛けた私に、店のマネージャーが小さく頷く。

階段を駆け上がった私の目の前に、激しい雨を呆然と見上げる彼女の背中があった。

「…最悪…」

そう小さく呟くと、彼女は激しい雨の中を傘もささずに踏み出した。

「待って下さい!」

追い掛けて彼女の腕を掴むと、思い切り振りほどかれた。

「放って置いて!」

「待ちなさい、ケイ!」

再び手を握り、私の方に振り向かせる。

激しい雨と雷の中、ずぶ濡れになりながら揉み合い、彼女が叫んだ。

「貴方には関係無いわ！私達、家族の問題だもの！」

「そうかも知れませんが、話を聞いてしまった以上、放って置く事は出来ません！」

「手を離して！」

視線を私から外したまま、彼女は叫ぶ。

「離して！帰るの！」

「どこに帰るのです！？」

「家に……」

「先程の話では、帰る家は無いのでは！？」

雷鳴がとどろき、彼女はビクリと身を震わせた。

「……帰るの……お母様の所に……行くの……」

幼子のように心許ない声を出す彼女の顎を引き上げ、焦点の合わない目を覗き込む。

「ケイ？」

天を引き裂く稲妻と響き渡る雷鳴と共に、一瞬にして世界が暗闇に覆われた。

「……華奈子」

呼び掛けた途端にカクンと私の腕の中の躰が崩れ落ち、抱き上げながら私は彼女の耳に囁いた。

「このまま貴女を拐って行きます……いいですね？」

彼女の手が、私のスーツの襟を握り締めた事を了承と受け取り、私は背後から近づくヘッドライトに向かい合図を送った。

屋敷に連れ帰り、着替えを渡して風呂に入る様に諭しても、彼女は放心した様に首を振るばかりだ。

仕方無くバスタオルで全身を拭いてやり、バスローブを羽織らせてやると、鼻を吸いながらぼんやりと私を見上げた。

「……誰？」

「エドですよ、クラブでお会いした……覚えていませんか？」

「……え……ああ……貴方は……あのイシノセイなの？」

「え？何ですか？」

「私…名前から、てつきり女性だつて…思い込んで…」

「ケイ？」

朦朧とした彼女は、ソファで隣に座る私の膝に乗り上がる様にして、頬に手を添えると私の瞳を覗き込んだ。

「あの人達は、私から全て奪いたいよね…家も会社も…人も…思い出も…みんな」

「大丈夫ですか、ケイ？しつかりして下さい」

「貴方だけはね…ちゃんと私が守らなきゃって思つて…ずっと…」

「守る？私を？」

「約束…そう、約束したのに…孝さんとも約束したのに…そんなに絵美が魅力的だったの？わかつてる…わかつてるけど…信じたかつたのに…」

これは、彼女の中に溜まつた澱だ…ずっと蓋をして来た心の中を、誰かに語り掛けているのだろうが…一体誰に？

「ごめんなさいね、ずっと守つてあげるって約束…私も果たせないかもしれない。でもね大丈夫よ…あの人なら、きっと貴方も元の居場所に戻してくれるわ。貴方は大丈夫…きっと戻れるわ」

「…ケイ」

朦朧としながらも、真剣に語り掛けて来る瞳に、私は彼女の背中に腕を回して抱き締めた…バスローブの下に隠れる柔らかな、少し熱っぽい躰が私に添う。

「…疲れてしまったの…何もかも」

「…華奈子」

「わかつてるわ…これは夢よ…現実逃避した私の夢…マッチ売りの少女みたいに、火が消えると全て消えてしまう」

「世の中、辛い事ばかりじゃ無い…幸せな事を考えて…」

「無理…現実辛い事ばかり…あの話の最後の様に、貴方の腕の中で消えてしまえたらいいのに…」

「いらつしゃい、華奈子」

私は彼女を抱き上げてベッドに運び、枕元に彼女を抱き抱える様に

座り、その背中を優しく撫でてやった。

「辛い事はね、泣いて涙と一緒に全て流してしまえばいいんですよ」
そうやって私は、一晩中彼女の事を撫であやし続けた。

「…暖かい」

一頻り泣き続けた彼女がそう言って寝たのは、明け方近くだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7223x/>

翠玉慕情

2011年10月19日02時06分発行